

師走の候 宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部会員の皆様には、益々ご清福の段 大慶至極に存じ上げます。また皆様には日頃より、当会の運営にご尽力を賜り、衷心より厚くお礼申し上げます。青年部会宮崎大会の事を、真つ先にご報告せねばなりません。全国より四百名を超える同志が早朝の新田原に集結後、同基地より第一ヘリ団が運用するCH47に逐次搭乗して、日向灘洋上に停泊中のヘリ空母「いせ」に着艦し、正に今日的な課題である陸海空自衛隊統合運用を実現し、これまでの全国大会等では嘗て無い規模でした。また午後からの記念式典では森本前防衛大臣の講演終了後に、来年全国大会を主管する大阪が紹介されましたが、次回の九州・沖縄大会は防衛協会と青年部会共催を検討中と云う事で現在未定のようです。宮崎支部会員の皆様には開催担当県と云う事で裏方に徹して頂き、ご苦勞さまでした。大会実行副委員長として心より感謝申し上げます。同十三日は東京憲政記念館にての「日本会議・全国代表者大会」に出席したところ、自民党高市早苗氏、維新の会平沼赳夫氏、みんなの党浅尾慶一郎氏など、改憲勢力急先鋒の論客達が一堂に会して、櫻井よし子氏の司会の下、「なぜ今改憲なのか」を熱く語りられました。全国から参集した日本会議の支部長さん達も、発言者の片言隻句を聞き逃すまいと、真剣に聴取し盛んに拍手を繰り返してました。その中で改憲へのロードマップが提案され、安部政権の残り三年間で国民運動、地方会議、国会の三点を見据え、平成二十八年の成立を目指しているようですが、やはり国民投票が大きく立ちはだかります。共産党などが市民運動を標榜し全国展開している「九条の会」等は既に地方都市や市民の間に広く浸透しており、全く予断を許しません。我々も機会ある毎に声を上げ「祖国は自らの血と汗で守り抜く」の決意と覚悟、更に矜持を持ち続け、改憲への行動が肝要かと存じます。同二十三日は晴天の下、川南護国神社にて宮崎県空挺同志会主催の戦没者慰霊祭が盛大に挙行され、多くの関係者が参列されました。川南町出身のご英霊が六三四柱、旧陸軍の第一、第二挺進連隊等のご英霊約一万二千柱の御霊に、都城四十三連隊の国旗掲揚隊と喇叭隊の支援を得て、参列者全員で哀悼の誠を捧げた次第です。当日は前田第一空挺団長も激務の合間に玉串奉奠をされましたが、微風快晴の正に「降下日和」で、衣笠全日本空挺同志会会長の朗々と流れる追悼文も、在天のご英霊の耳元に心地よく響いた事でしよう。ところろで台風三十号の甚大な被害を受けたフィリピンへ向けて、十一月十八日、呉港から国際緊急援助隊約一千百人の陸海空自衛官がヘリ空母「いせ」等で出港したニュースはご存じかと思えます。実はその中に第一ヘリ団所属の愚息信介が、大型輸送ヘリCH47の整備要員として乗り組んでおりました。十二月一日は、次女美帆の結婚披露宴を半年前から予定しており、信介はもちろん長兄として末妹の花嫁姿を楽しみにしていたのですが、これも自衛官の宿命であり、従容として任務に赴いたところですが、そんな折、中国が尖閣列島を含む東シナ海に防空識別圏を設定したとの挑発的行動に、日米韓は一斉に即時撤回を当然要求致しましたが、正に「支那の横暴これに極まれり」と云った感が否めません。明年こそ我々日本国民にとり、希望の一年である事を祈念します。

平成二十五年十二月一日